



源氏新門抄

十六



天
文
庫



御書五十四帖此約の外は三書見れば御所を
 さんのおよびありて約とありてことごとく御後
 と天をれ三諦ははと定むるを記すの宣諦
 やその人らもけしえその名あまの記すの御諦之け
 や御六巻の有光を御くらし中諦之中道実
 相くされらるる姑と天を六千巻ははと色相を争
 あらうと亦有らるるれも終あらうるの御門也
 重隠といふ約古来御去の事よ用ひ禁むれ約守
 海之源氏君に重隠公年の日よあまの御書といふこと
 らまめん為ふ名けらるる宿も事重んぬれ約よま
 故院源氏うせ給ひて後二三年づら其ませとら
 じき給ひ一候候はあまの事度よのけめで
 くくのんあまのりかむくならりらるる
 け約して源氏世々むじき候候は隠居一給
 てうかむ御書も何 重隠とらる約れあま
 万葉第一号削皇子亮御の時置始東人守
 大君神ありませ天をれらるるまむられ給ひ
 同第三大津白子被死時作奇
百傳りつては荒根の池小崎野と今日のかそやをむれん
 同第三神龜六年た久臣長屋王賜死之時作奇

幸一八十一

二

大君はみよのこをたわひたの河也あし孫ぞんけはま
万葉よ天平甲子七年新羅尼理額死去れけり大
伴郎女あひい作奇

とあるの余ありあれは家らう出くま之れま
又中隠とて初遊去れまよあしう奇りう紫雲
あうあひてみやまれわぬまを慮り秋の月ま
金葉九卷堀川院七時源後重武部重下りり
よきて中納言重資の臥ゴ辨して侍まの河つら
日見あま孫さるぬは中も我方一にぞとれて
如げの奇あれはたの遊去れりよあしう

或説云源氏君有室而善死之例あり其常の仙あり
天上より日かふ役行者西とて志法目卒武
尊の白鳥とて越田より西に去佛土は隆寺
れ二王と作て春日山一苑入この作は佛と世俗
春日の山作とて又標中丸又の幡大菩薩降れ奉
臣よ武日名良各不悉其終その外日中て神
仙の傳記皆滅ありとて終九宿本卷よとせ
終よとあれは終は不周
或説云相意更衣師衣か上あ相あ案あのこれ
終よ終歎の初とて終は外其司馬遷班固

が筆下も乃^とび^びさよあ^らる^る縁^ゆん^ん光^ひ海^う氏^し也^や結^むす
 ず^まん^ん藏^{ざい}光^{くわう}天^{てん}下^かよ^ある^るや^まま^まの^の流^{りゅう}聖^{せい}一^{いつ}言^{げん}
 かりりめ^めなる^るん^んい^いか^かう^う候^{こう}へ^へま^まれ^れて^てま^まの
 あ^あら^らう^う天^{てん}人^{にん}聖^{せい}衆^{しゆ}の^の本^{ほん}迹^じの^の相^{さう}と^とま^まふ^ふらん^んも
 か^かう^うら^らう^うら^らう^うべ^べー^ーま^まの^のい^いま^まを^を慮^りう^うこ^こめ^めく
 ず^ず後^ごし^しう^うま^まに^にけ^け義^ぎ不^ふ用^{よう}し^し或^あ教^{きやう}が^が筆^{ひつ}下^かれ^れ及^{およ}
 ず^ずま^まん^んの^のあ^あら^らう^うの^の書^{かき}か^かば^ば言^{げん}論^{ろん}道^{だう}教^{きやう}なる^る
 なる^る一^{いつ}縁^ゆん^ん熱^{ねつ}く^くぶ^ぶ家^けよ^よ甚^{ぜん}深^{しん}の^の意^い趣^{すう}わ^わり^り入^い十
 四^じ指^しと^と釋^{しやく}す^すの^の五^ご時^じ罪^{ざい}教^{きやう}よ^よな^なく^くや^や願^{げん}と^とま^ま如^に冥^{めい}冥^{めい}
 相^{さう}よ^よあ^あら^らう^う好^{こう}色^{しき}れ^れる^るも^も流^{りゅう}の^の佛^{ぶつ}道^{だう}よ^よ改^{かい}ま^ま家^け
 娑^{しあ}之^し煩^{ぼん}悩^{なう}即^{じやく}菩^ぼ提^{だい}生^{しやう}氣^き即^{じやく}涅^{ねつ}槃^{ぱん}と^と觀^{くわん}じ^じ水^{すい}波^ぱ乃^な
 る^ると^と中^{ちゆう}之^し世^せ間^{かん}の^の又^{また}常^{じやう}と^とい^いふ^ふも^も佛^{ぶつ}法^{ぽう}の^の五^ご戒^{がい}也^や
 名^なづ^づり^りあ^あら^らう^うて^て卷^{まき}と^とぬ^ぬ例^{れい}

何^{なに}名^な所^{しよ}立^たて^ての^の四^し教^{きやう}三^{さん}

藏^{ざう}教^{きやう}通^{つう}教^{きやう}圓^{えん}教^{きやう}別^{べつ}教^{きやう}四^し門^{もん}三^{さん}藏^{ざう}淫^{いん}有^{ゆう}門^{もん}通^{つう}教^{きやう}空^{くう}門^{もん}
 圓^{えん}教^{きやう}兆^{てう}有^{ゆう}非^ひ空^{くう}門^{もん}別^{べつ}教^{きやう}亦^{また}有^{ゆう}亦^{また}空^{くう}門^{もん}也^や有^{ゆう}門^{もん}れ^れ得^{とく}る^る
 ハ昆^{こん}曇^{どん}論^{ろん}空^{くう}門^{もん}れ^れ得^{とく}る^る成^{じやう}實^{じつ}論^{ろん}明^{めい}と^とり^り兆^{てう}有^{ゆう}兆^{てう}
 空^{くう}門^{もん}ハ迦^か論^{ろん}正^{せい}淫^{いん}ノ^の説^{せつ}亦^{また}有^{ゆう}亦^{また}空^{くう}門^{もん}ハ昆^{こん}勃^{ぼつ}論^{ろん}ノ^の明^{めい}と^とり^り
 と^とこ^こに^にけ^けん^んげ^げ淫^{いん}論^{ろん}天^{てん}皇^{わう}よ^よと^とい^いふ^ふら^らう^うて^て流^{りゅう}聖^{せい}一^{いつ}言^{げん}持^ぢ持^ぢせ^せ
 じ^じと^とり^り家^けと^と本^{ほん}所^{しよ}有^{ゆう}亦^{また}空^{くう}門^{もん}レ^レ義^ぎと^とら^らう^うて^て中^{ちゆう}之^し淫^{いん}論^{ろん}
 一^{いつ}と^とり^り家^け圓^{えん}別^{べつ}の^の二^に教^{きやう}と^と判^{はん}ト^ト好^{こう}ト^ト不^ふ思^し議^ぎと^とい^いふ^ふ

今を隠卷も作者此胸中よりさすりて世に傳は
らざればその意趣言外ありき

花
色詩三百十一篇中小雅十南十自十華十華十泰十

以上三篇名 由庚十 崇丘十 由儀十 以上三篇名 け六篇十篇

の名をも強て詩の約なり 逸詩としてりり約

ありしが突らとさ家よりして後東廣微と

りみんが辭と作入て補毛の詩と名符て又逸

此第十卷に載らる朱晦庵の詩とて

樂曲の名されば其約なりとらり何ぞとて

釋一ゆり如何格篇の名此とありて約あり

を隠れぬものゆりて初るはと曰ふ一

師云
色詩は逸詩六篇の名は付くを悉くして東廣

微辭とえらりしを隠とて名とて初

いさし初たり

を隠六帖の中よこめらるる

董之藏より十三載して八年のり又朱在

院。雲若郭卿の致仕を以て長。頼黒を長以下

れんをゆりてせ終るる

流上る源氏よりも為代世のおびしき
 今上り子より春文治一應に
 此叔父今上り文治此後
 一應世のおびしき
 源氏此時代
 業之源氏に公卿殿の大
 世のくもけひさざりし
 天統此徳と儻く
 を此養と得て如
 是れ白意の
 源氏の餘慶も流さる
 天統と備さる源氏此
 徳と儻く

この評義に末く此詞よりお明なる

かゝるいふあり

実按云儻也此ふいふ

あれは内証の源氏に
 實なるに

いそよお

源氏に

いそよお

融公六条河

源氏と作みごとく
 流上る

流上る

三條殿と

俱舎論曰自下

月二十五月月輪次第増光故名
 自十六日至
 三十日月輪次第減光故名
 是月

花

夕暮に花の香を扇と落葉不宮と十五日
かきいて後庭すりの例うつしの物語乃櫻の
うの巻よ云たれかかゝるのあやい殿いふ家
うこそ十五夜つおけつてき

史どけちうらや

佛法夜滅度如薪盡火滅法華

是れ花の盛るげ母もあやもたむえまの物也
おん

酒をこころに地をさする物ありはを櫻よさひまは

花

跡りありをぞめでとも櫻花ありて母もさすれ

らもさすれは櫻あやもたむえまの物也

秋夜と中將ありて

は巻もそ十日殿は二月侍

後同秋中ねありは竹川中ねは侍とある

呼ばしつらまもよひつらけ

はたりをうけかふ

谷水院れは絵の加際よく四

信小叙も海之年官年舞と絵とらう

女宮も一三夜

母致ははは娘の谷水院の子

是れは是らうり後竹川巻ふ一のあやそ無里乃女

此娘も男子一人又女子一人女一と月殿も生れ給

母合三人

せんげうち子れ我の身もさひかんさう

善巧太子

後世のつらもよきつらもよき

後世のつらもよきつらもよき

つらもよきつらもよき

つらもよきつらもよき

つらもよきつらもよき

つらもよきつらもよき

つらもよきつらもよき

つらもよきつらもよき

つらもよきつらもよき

つらもよきつらもよき

日本世二代用明帝第一子聖德太子者軀體甚

香懷抱之人奇馥淫衣數月不減元亨釋書經

大宋太祖皇帝姓趙諱匡胤ト云洛陽ノ夾馬營ト云

一胎テ生シ玉フ其所七日香カリト故ニ香孩兒營ト云

所フ云ク生シ夕兒モ香ハシカリトト之湯山縣ト云

香來馬孩ト云向アリ一書ニ甲馬營ト書タリ夾馬協

曰宋太祖啓運趙氏名匡胤生甲馬營赤光滿室

營中異香一月人謂之香孩兒營

體ハ清ニ梅ノ香ハ甚クニ好レテ之ヲ好ム

人あり

そのつと居りつらり志と居りつらり志とあり

源氏君と著念の礼ありしとて身外は

礼を以て念うるは二世に於ては

礼を以て念ふは二世に於ては

学又寸

婚を以てし海に下りては

もつとあり

作法は人事をとつと桐葉帝より

礼男女に礼を一つとして

てのよゆに災ありしとて

宮室辨外内男不女不出と天子の風と

万国男の外を女の内と

邪後と事あり 蓋元慶元年の

九葉として寧お申侍とあり

賭弓は正月十八日也天子弓場殿

賀とて其のまじりぬ十六代

正月十八日幸於豊後

春よりとありしとて礼記

凡在凶儀凡在吉儀四府舍人

ても奏せし流勝の方へ負方は罰酒とけし又勝
 此方の舞樂と奏して此方の束の管領されん
 こそと大射もは養食とふと還養食とふ
 けり方へ右を左にたておきて六条院に里舞
 還養食とあこふり又殿上は賭弓とて臨射
 弓と西院あつて殿上の侍臣共の射へ

しめまゝしてかまはる神

風俗にし女と求は

あり 八し女 凡俗 やとめ我が八し女だつて

女への屋に女 神のますけいやろは神は

還養食に時求子とね照り下舞へ神は

あしと求子等拾遺五賀歌云く けりて卒都

は男使とて付らるるていふ

大中臣徳定

かまはる卒都はは枝はるる各のいふ

かまはるる神とひるごとく

曲 仍老

屋といあやめく

長敷の周にあやめ梅はるるをみぬ

香よこそげみぬら物ありけれ

海言の色いまぐぬ梅の花も心をぬら物ありけれ

紅梅

白宮年一 監年也 推毛更也

以罰為養 石菴 廿歲 其乃事之

その以めざらぬ言

系馬云 若草下よた大

辨紅梅よ 梅系大 何言竹川よ 大何言たおるけり

依衣と長く

仲云

仍きん一 終るごとく 大何言とぢや

いふ人ともよと 終るごとく 及せむだとも 義とて

後れおりの世のいひしとめ

立おる

無里大 政大 長

よるしるいそ 隠るる 八ヶ年の日さる一 致はる

政大 長れ 次よるもつる 官されい 後と せうり 何海云

たう 集よ 忠仁公と 前のおりい ちかひのしり ちかひ

ことす 依い 前官れ 義よい あこと 延喜れ 以て 政大

長共二人 仍 雖不 辭官 前後れ 中け け 此れ 義 欽

其 此れ 事と して 代な して 其日 此れ 神の 心と けり 也

けり 代も 一し ぞと して

仲云

天子 天照 大 神れ 也

ち 其日 神れ 代い 名 長れ 契り 神代 けり けり 也

流い 代も 必 有 原 氏 の 姫 名 立 けり 也 也 桐 葉 帝

代よ 八 有 靈 冷 泉 帝 中 梅 意 代 今 代 けり 也 明

石 女 神 立 后

仲云

如 此 源 氏 此 姫 名 打 つ こと 立 后 也 也

今 紅 梅 大 長 の 大 名 と 春 交 入 日 一 して 舞 景 殿

と 一 して 后 也 一 して 有 氏 此 姫 名 一 して 其 日

此神の神さうまけりんとして女事しよ云源氏乃
 折志さうり名ふの宿り人る世の人ゆりしゆえ
 して又善業下まきまき女御明名の宿りしゆ
 た教さひおひしてしよいあわえさるびふし源氏
 れ打つてさうり名ふの宿りしゆえと世人あふす之
 後よき花 去日大明神れい新のよの後ま
 産院御す長曆三年四月春日明神被新神
 太神宮之度々官弊不請之依此藤氏宿地
 依是日之臣教通公一女可入内之由被宣下之
 是年十二月内之臣女真子入内為女御しこ
 としてさうり名ふの宿りしゆえと世人あふす之
 後よき花 去日大明神れい新のよの後ま

源守の言

薰之又竹川巻れ来よ薰と中納言

よいざ家よりみさうり物して白文巻より推
 せりて又巻の混れしてさうり

いんがれつすまが形をれ江梅

春風北戸千莖竹

暁日東簷一樹花

白氏文集

さうり

君あがでさうり名ふの宿りしゆえと世人あふす之
 後よき花 去日大明神れい新のよの後ま

きんどうびんせつしんしん

法氏と佛と

一白雲と阿難と寸

大論曰釋迦佛入涅槃

槃之後阿難食高座結集諸經之時具形如佛仍

衆會疑佛再出給以之阿難未證四果羅漢之位之

人也仍阿羅漢等不覺其時阿難自然現瑞

佛彼滅度阿難請問四事佛一々答我滅度後一

依回念処住二以戒為師三點損惡性比丘四下

切注首皆云如是我聞一時佛在其処与衆看手

等之結集時阿難昇座欲宣佛法咸得自身相好

如佛衆起三疑一疑佛重起說法二疑他方佛未

三疑阿難成佛故說此言三疑類新

師之翻譯名義一十大弟子牙八篇云阿難大論秦言

觀喜佛成道時斛飯王家使來白淨飯王言貴弟

生男王心觀喜言今日大吉語來使言是男當字

為阿難奉国飲慶又名慶喜亦翻無染雖殘思味

盡隨佛入天人竜宮見女心無染看故云持三下

藏教云云有三一阿難此云慶喜傳言南藏二阿難跋陀此云喜賢下持

録覺三阿難迦羅此云喜海持善喜藏圓覺略疏云略見一人隨德

名別

うみはあしりまうごそおしりしん

竹川 白文并二 撰上七末の堅三九

以等并詞為卷の前の事の董の九歳の事とす
 くらげ事の董十四つりとすて次の年十二歳の
 此は月より七月までとすて又次は年十三歳の
 ころ何り又年比ありてと云約は十七十八の
 事とすころ何りけ事とすまの董中納言成
 ころと志海より中納言成の十九年何り
 け一推中巻よりころ何り物とす十の十九
 まで六十年のころとすけ卷の志とすころ何り
 一白文卷より十の年元服して侍候に
 いたりころ何り十九の年宰相中將とすころ何り
 乃事とすころ何りとも六十年の事とすのせり
 是とすこれとす事とす白文の中とす撰并の
 一又此事は十九の年乃秋をばて又中納言
 ころ何り事とす事とす事とす事とす中納言
 のころ何り事とす十九の年の秋よりとす并
 ころ何り事とす

保氏れりがしめとすれ
 曾れ字しめ孫の事
 續會曰曾重也。自曾祖至無窮皆得稱曾孫
 實校とすは後湯は事或部が作とんせびとす人

續會曰曾重也。自曾祖至無窮皆得稱曾孫
 實校とすは後湯は事或部が作とんせびとす人

世の世の権門とて知らず忍てめはたぢり
るも後れ代はひらう方代まで悪名を
後とてしるべき人の戒とせり

人れん時よのこよ候もいやくれり

白氏文集曰人心好悪を不常也

あまけすうきとて
無き事あること巧言

念室よりありしと

しりくーいふはなり
吾人あふく西人

よのあーくまはずありーいふきむーたう

神とて一編するらうーいふく人の持徳と

まーい和う母子集よせよのそーとげ

とらふ字たよーいふら初之春秋は一字の

應衣懸とらふく

目とてらあ〜終
已被揚妃送側目 上高人討

よとあ〜いふはあ〜いふさ〜いふん
杭樹無殺

野宮奇合判詞
順云子権よ白ふ花れわらう

あらのあまめれやう〜いふま〜いふく〜いふん
後家

花そ〜いふまありし音らう候於多人いふ
我のわら〜いふ校おすらりいふ校の情の世

今案のいふ校の筆のいふ〜いふ〜いふ

あうらりめと

あうらりも香をまよふ句の節は梅の枝梅

梅をよこらさうと

伊馬掣 呂梅枝

梅がえよ来あり言やまきけてくれ

まきけてまけたる言のうらつ

あうれさうやうらうらつ

言のあもさそらさう

朗詠集。鶯

鶯聲 詠 来花下草色 梅留坐水邊 白乐天

花の香成ぬ後またてを言のうらつ

さうらりさう

伊馬掣 呂 此殿者

けあはしうらうらつ 梅の枝梅

さうらりさうらつ 梅の枝梅

右今集序六義此等の申のうらつ

けあはしうらうらつ 梅の枝梅

一説者よさうらつ 梅の枝梅

出家あしうらつ 梅の枝梅

がうら

竹川と同一

竹川

伊馬掣

實梅云同

一説者

竹川の梅の枝梅のうらつ

花蘭ニは穢ニらむとくも
こゝろにて

竹川ニの河内國ニありて
しんてりて

竹川ノの橋ハはあまの花園ニは
く揺れあれむ

揺る揺れの揺る揺れの揺る
揺る揺れの揺る揺れの揺る

のやうニあまの川ニありて
つらむあり

中庸ニ曰ク莫ク見ル辛ニ隱ニ莫ク顯ニ辛ニ微ニ故ニ
君子ノ慎ム其ノ獨也

け揺の老母ありて
とらひ

成人ノ園林半ニ喬木あり
白良文集

鐘山ニありて
賭と寸考也負て

何レの後代也事もれを賭と寸考也負て

似らざるや

まよ敷めんほれしこものみよりく

揚らうまよふくほれん花の敷めんほれ形見よ

高舞^{こま}れ乱聲^{らんせい}とまよふと 高舞^{たか}樂^{がく}に在あり

競馬^{けいば}をたのむ勝れ方よ乱聲とまよふに在あり

まよふとまよふ

ふありそ池のみまよふはまよふ花泡とありてまよふに

枝^{えだ}もあつた敷めんほれまよふて水の泡とまよふ

ありまよふの形あり

ふまよふまよふの形ありまよふまよふまよふまよふ

まよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

らまよふまよふ

嬌^{あやめ}のまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

まよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

まよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

まよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

まよふまよふまよふまよふ

物^{もの}まよふ物子のまよふまよふまよふまよふまよふ

是^{こゝ}の方まよふまよふまよふまよふまよふまよふ

まよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

前よ是く代少弱のみよ今に臨りてさひんらん
 命のさひん母かあしは長とさふとづりて
 一言の語んせはそれなひりさめしきば
 あしやきんと云初は回答してあり
 多般えあはれはさう今に臨りてさひんらん
 と也あての世乃長とさふとづりて
 明くよさひんは物れさふと

たうあつてとてあつ

史記何者吳世家曰季札之初使北適徐君徐君好季

札のさひんあつてとてあつ

史記吳世家曰季札之初使北適徐君徐君好季
 札鈕口弗敢言季札心知之為使上國未獻還至
 徐君已死於是乃解其寶釵繫之徐君冢樹而去
 從者曰徐君已死尚誰吊乎季札曰不然始吾心
 已許之豈以死倍吾心乎

後頼筑前守とて下侍或人たかと約束して
 何しらすはれはあつてとてあつ
 まりあつてとてあつと者はしす
 後悔とてははれはあつてとてあつ

かゝるあやうなを月よき今すし〜

美し敷の園あり梅の毛をみねねむらう〜

翁人のあねは〜

了菩薩のきつと之福丸白ひ園あり〜

也園ありも臨幸の敷る月世は別〜

はとま〜

竹河のそれ敷る〜 吉年正月乃る敷

あう〜のこ〜と〜

日よりあう〜

なほ後竹河〜

故宮楽院の臨幸は〜

〜と〜の〜

右の地〜

寔は女樂あり〜

〜と〜

女樂あり〜

〜と〜

か〜と〜

〜と〜

〜と〜

〜と〜

よふ集らるる例ぞよまを被せらる今の世の母一
官ふし娘よゆつるの連綿のまに

け者の母しせよと年比戸給ひ一はたはるる
みより 実母を中娘に侍のうらぬおはるる

まゝお母のあはれもやちもかたすくおく
又おつるの御恩もこのゆかり給はるる

みらのまておつるまら言ひ

お母のあはれおつる常陸常のからなり侍人
中納言のまらるるよまの侍は人のおははるる
しお母のまらるるまらるる

一様云董おつるのまらるるて新しむる
乳おつるお母のおはるるまらるる
あまおつるお母のおはるるまらるる
あまおつるお母のおはるるまらるる

まらるるお母のおはるるまらるる
まらるるお母のおはるるまらるる
まらるるお母のおはるるまらるる
まらるるお母のおはるるまらるる

お母のおはるるまらるる

お母の中へおはるる



